

暮らしの中のハンガリー政治改革



経済学部 家田 修

昨年(1989年)は東欧諸国に大きな政治的変動が起き、ベルリンの壁崩壊に象徴されるように、東西関係再編のきっかけとなった。東欧の経済史を専攻している筆者は、たまたま87年の秋から2年間ハンガリーの東欧研究センターで勉強する機会を持ち、暮らしの中でその変化を見届けることになった。

東欧研究センターは10年ほど前に科学アカデミーの附属研究機関として発足し、30歳代の若手歴史家を中心に20名余りの研究者を擁している。また、大学院制度がないハンガリーでは、研究者を志す者はまず科学アカデミーの奨励研究員となる場合が多く、センターにも非常勤研究員として数名が所属していた。民族的には、もちろん全員「ハンガリー人」であるが、ポーランド系、ギリシャ系、トルコ系と雑多で、ユダヤ系も少なくなかった。さて、私がブダペシュトに到着して早速に古巣の経済大学経済史研究室に顔を出すと、旧友のクヴェール・ジェルジュ氏が開口一番、「この雑誌をみたか。1956年を革命と名づけたハンガリーで最初の印刷物だ」と、笑みをたたえながら手渡してくれた。この時点ではまだ「56年事件＝反革命」以外には公式的・政治的見解は存在しなかったし、2年後のナジュ・イムレ(56年事件の中心人物で、事件後に処刑された)名誉回復など全く想像だにできなかった。もちろん以前でも公式の席以外では、人々は56年事件を決して反革命とは言わなかった。反体制派は革命と言い、普通の市民は事件と呼んでいた。しかしこの論文が出た87年には、学術的な範囲に限ってとはいえ、56年を革命と書き記し得る状況が生まれていた。これは驚きであり、かつその後の

変化を予期させるものだった。またクヴェール氏からは「民主フォーラム」、「埠頭倶楽部」そして「学生寮自主講座」の3つがいま党に最もにらまれている在野の組織だと聞かされた。「民主フォーラム」は87年の9月に結成された市民団体で、人民派といわれる作家達を中心となって講演会活動を組織していた。

「埠頭倶楽部」は82年に発足した広範な知識人の公開サークルである。「学生寮自主講座」は自由主義派の若手研究者や学生が80年代前半に始めた学習会運動である。上記の雑誌もそうした「学生寮自主講座」の一つが刊行している。いずれにせよ政治改革が始まるかなり前から活発な56年研究や市民運動が展開していたのである。

クヴェール氏のことを少し紹介しよう。彼はハンガリー経済史の専門家であり、不惑を少し過ぎたところである。大学生時代にはトロツキーに興味を持ち、ロシア史を志した。また彼自身も経済大学内で「学生寮自主講座」を主宰し、さらには全国の若手歴史家数百名を糾合する新生「社会史学会」の牽引者でもある。このように紹介すると氏が政治改革運動の急先鋒であるかのように聞こえるが、実際には政治指向はほとんどない。ただ、主任教授が強引な新任の人事をしようとした時、他の教官が沈黙してしまったのに対して彼が控え目ながら抗議の意思を表明したことがあり、実は意識的に政治への衝動を自己抑制しているのでは、と私には思われた。家系的には地方都市の裕福な知識人の家に生まれ、一家は共産党政権成立後、財産没収などの政治的抑圧を受けてきた。それでも両親は自由闊達な行き方を貫き、医師だった父親は誠実

な人柄故に一貫して町の人望を集めた。彼の中にあるリベラリズムはこの両親から受け継いだと、私は解釈している。政治に参加するかどうかは別として、在野改革派の指導者の中には、クヴェール氏のような生い立ちの知識人が少なくない。

さて88年の初め、古文書館通いの生活につき始めた頃、自主労組結成の動きが社会学研究所から起こった。公務員の定削ではないが、膨大な赤字財政を抱えるハンガリー政府は研究所の閉鎖や研究員の解雇を打ち出した。その矛先が同研究所にも向けられ、所員は労働組合に救済を申し立てた。しかし御用組合はなんらの対応もせず、結局、先の「埠頭倶楽部」のメンバー等に窮状が訴えられた。彼らはすぐにこれを取り上げ、二月に開かれた会合は会場横の中庭まで埋め尽くした参加者の熱気で寒さも吹き飛ばすほど高揚した。会合は事実上の自主労組結成準備大会となった。そして議論は既成の労組中央から割って出るべきか否か、新労組の対政府交渉力はどのようにして確保されうるのか、また財政的基盤はどうするのかと、白熱した。一気に独立労組を作り、党との対決姿勢を示そうという強硬意見もでたが、結局新労組組合員は既成労組の組合員資格も維持するという妥協案が大勢を占めた。裏話になるが、自主労組の名前をどうするかが話題になった時、まず気先を制して、「『連帯』とするのは避けよう」という冗談まじりの発言が飛び出し、会場は爆笑となった。数百万人のポーランド「連帯」と数百人のハンガリー「連帯」の落差が笑いを誘ったのだが、参加者の脳裏に当時まだ非法下にあった「連帯」の命運がよぎったのは間違いない。

この会合には東欧研究センターからも組合担当が出席し、翌週の定例出勤日にこの自主労組に参加するか否かが討議された。この研究センターでも研究機関の再編に伴う非常勤研究員の処遇がやはり問題になっていたので、自主労組の結成は好感をもって受け止められた。他の研究機関や大学でも多かれ少なかれ

状況は同じで、次々と加盟表明がなされた。こうして5月14日、党書記長カーダールが解任される一週間前、ハンガリー最初の自主労組が民主学術労組の名のもとに正式に発足した。これを機に自主労組の結成は徐々にではあるが広がっていった。しかし、ポーランドの例が示すように、自主労組の結成は政党の結成とは違い、それだけでは問題の解決を意味しない。東欧研究センターでも近い将来に予定されている他の研究機関との統合は避けられず、その際の人員整理に自主労組がどこまで抵抗しうるかは全く悲観的である。

ところでこの自主労組結成の動きとほぼ時を同じくして、難民救済委員会が市民の中から生まれた。85年頃からルーマニアでの圧政に耐えかねた住民が難民としてハンガリーに流入し始めていた。その中には旧知のハンガリー系一家もおり、「生命の危険を感じた」ので脱出せざるを得なかったと語っていた。彼は作家志望の学生時代、習作の空想小説が当局に反体制的とされ、一年間休みなく朝から深夜まで事情聴取された。それでも文筆活動をやめない彼はずっとにらまれていたのだ。また、たまたま乗せたヒッチハイクの三人連れはブラショフ市から来たルーマニア人だと言い、「自分たちは数か月前のデモに参加した。ルーマニアは最悪だ」と口々にチャウシェスクをののしった。こうした難民の大半は圧政に加えて民族的抑圧も受けていたハンガリー系市民だったため、ハンガリー人の民族意識を逆なでした。しかし民族問題で対ルーマニア関係がこじれることを恐れるハンガリー当局は静観し続けた。このため教会や市民ボランティアが次第に膨れ上がる難民の受け入れを始めた。上記委員会是这样した中で結成され、その中心的活動家の一人は長年ハンガリー系少数民族問題に取り組んできたレゲーニ夫人だった。彼女は協同組合研究所の研究員で10年来の友人でもある。彼女の家はほとんど難民の避難場所と化し、定住先が見つかったら出ていくという状態だった。従って家庭生活は全く犠牲にされ、年頃の娘

は何もそこまでしなくても思っていたようである。しかし夫人の親友でもあるEさんを、ルーマニアでは乳癌の手術はさせられないといひ、一家ごと自宅に引き取ったあたりから事情が変わった。Eさんの病状は手術後に一旦は快方に向かったが、それもつかの間で次第に容体が悪化し、数か月後には帰らぬ人となった。この間、娘さんも母親の寝食を忘れた献身的な看病に難民救済活動の深い意味を理解するようになり、協力を惜しまなくなった。敬けんなカトリックの夫人に、熱心なプロテスタントのEさんが二人の幼い息子の教育を託して静かに目を閉じたことも付記しておく。

話は東欧研究センターに戻る。このセンターには二人の年配の研究者がいた。一人はヘゲドゥーシュ・アンドラーシュ氏である。氏は56年事件の生き残りで、当時は改革派の若手共産党員だった。事件後、不遇な生活を送ってきたが、数年前から56年事件の証言を蒐集する活動に精力を注ぎ込んでいる。これは氏曰く、官製の文字の歴史に対する民衆の口述の歴史である。「当初は証言者を探したが、いまは順番待ちをしてもらうほど向こうからやって来る」とのこと。先に触れた雑誌論文が若手のラディカルな56年論だとすれば、こちらは長年の辛苦が生んだ地道な56年論だと言えよう。もう一人はバーチカイ・ヴェラ女史で、ハンガリー近世史の専門家である。彼女は56年事件でナジュと行動を共にした夫に従ってユーゴスラヴィラ大使館籠城とそれに続くルーマニア幽閉生活を経験した。興味深いのは彼女にしてもヘゲドゥーシュ氏にしてもその語る56年事件は年輪のせいなのか、ユダヤ系のせいなのか、それとも歴史家であるためなのか、実に淡々としている。こうしたユダヤ人の冷静な歴史見直しに接する時、56年を「民族」革命に押し込めてしまう一般の風潮に一抹の不安を覚えずにはいられない

かった。

最後に三人の市民に登場してもらおう。いずれも息子の友達の親である。一人はブダペシュト市役所の物価監督局に勤め、党籍なしの課長であることを誇りにしているナジュ夫人である。課長以上の管理職は95%が党籍にあるという。確かに彼女は職場で人望を集めている。しかしその彼女も転機にある。曰く、役所内ではある日から価格統制はまかりならぬとなった。このため市民からの暴利に対する苦情を取り上げると、独裁制支持者として非難されかねない雰囲気になった。さらに今後は政治改革がらみで人事や政策が錯綜し、まともに仕事は出来なくなる。それで、知り合いからの誘いもあり、民間会社の経営者として再出発することを真剣に考えている、と言うのである。二人目は自分のトラックで自営運送業を営んでいるホルヴァート氏である。一家はちょうど家の増築中だった。日本と違い、作業はほとんど自分達でやる。それにしても、くる日もくる日も日中に建設作業をしているので、心配になってそれとなく本業の方はどうなっているのかと聞いてみた。曰く、今の重税では収入の三分の二を国に取られてしまう。それに税の累進率が高いので働いただけ損になる。建築資材はあつと言つ間に二倍になった。20年間このために金を貯めてきたが、お陰でいつ完成するかめども立たない。そう言つて埃だらけのがつしりした両の手を私に差し出して、「あのお偉方は働きもせず、に賄賂で豪邸を建てている。仕事柄、いくらでも実例を知っている。あんちきしょうめ。政治改革といつても何も変わらないさ」と政治批判が始まり、それは延々と続いた。

改革のなかで様々な思いと現実が錯綜するハンガリー。さらには隣国ルーマニアでの民族対立の再熱が聞こえてきた。改革の前途はこれまで以上に多難である。